

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：12606
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：21K00167
研究課題名（和文）18世紀フランスの王妃をめぐる表象研究 マリー・レクザンスカとアントワネット

研究課題名（英文）A Study of Representations of Queens in Eighteenth-Century France: Marie Leszczyńska and Marie Antoinette

研究代表者
小林 亜起子（KOBAYASHI, Akiko）

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：00618275
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀の王妃マリー・レクザンスカとマリー・アントワネットの表象をめぐる総合研究である。王妃のイメージ形成に関わる先行研究のなかで、これまで看過されてきた一連の肖像画とともに、ヴェルサイユ宮の王妃の内殿を飾る絵画装飾について、美術史学的見地から調査研究を行った。これらの研究成果は、近世フランスの王妃をめぐる表象研究の出発点として16、17世紀の王妃のイメージ研究へと展開可能な萌芽研究として位置付けられ、フランス王権表象の包括的理解に寄与するものとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世フランスの王権表象研究は、芸術家が生み出した王のイメージ分析に重きが置かれ、王妃の表象については十分な関心が払われてきたとは言いがたい。そこで本研究では、18世紀の二人の王妃をめぐる表象について、美術史的な視点に基づく調査分析を行った。そこで得られた知見は、これまで断片的にしか扱われてこなかった近世フランス王妃の表象研究の進展に寄与するとともに、フランスの王権表象に対する総合的理解の深化に資するものとなった。その国際的・学術的意義を考慮し、研究成果は欧語論文で発表された。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the representation of 18th-century queens, Marie Leszczyńska, queen, consort of Louis XV, and Marie Antoinette, queen, consort of Louis XVI. It includes a series of portraits that have been neglected in previous studies on the creation of the queen's image, as well as a survey of paintings located in the queen's private cabinet at Versailles. The results of this research have served as a starting point for the study of representation of queenship in early modern France, and provide the seeds for further investigations into the case of queens in the 16th and 17th centuries. They also contributed to an understanding of the representation of French kingship in this period.

研究分野：美術史

キーワード：フランスの王妃 マリー・レクザンスカ マリー・アントワネット ヴェルサイユ宮殿 絵画装飾 タピスリー コブラン製作所

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究テーマは、近世フランスの王権の庇護下に、フォンテーヌブロー、ゴブランやボーヴェで織られたタピスリーに関する著者の先行研究から着想を得たものである。ここでは、これらの工房や製作所のタピスリー連作に、国王を称揚するイメージのほかにも、王妃や寵姫を示唆する図像が組み込まれた作品があるという新知見が提示された。タピスリーをはじめとする美術作品に見られる王権表象については、王のイメージ、図像表現の分析を中心とする研究の蓄積がある。しかしながら王妃の表象については、周辺のなもとして扱われる傾向があり、美術史的な視点に基づく研究が十分行われてきたとはいえない。このような研究状況を鑑み、これまで断片的にしか取り上げられることのなかった王妃の表象を研究することで、フランスの王権表象の全体像を捉え直す必要があるのではないかと考えた。

(2) 近世フランス王妃の表象研究を進めるための最初の取り組みとして、本研究では、18世紀の2人の王妃、ルイ15世の王妃マリー・レクザンスカ(1703-1768)とルイ16世の王妃マリー・アントワネット(1755-1793)に焦点を絞った。考察を進めるうえでは、王妃のイメージ形成に関わる先行研究のなかで、これまで看過されてきた一連の肖像画とともに、ヴェルサイユ宮の王妃の内殿を飾る絵画装飾に特化することとした。それにより、3年間の研究期間内で実現可能な掘り下げた調査研究を実施することを目指した。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、上述のように王妃の肖像画やヴェルサイユ宮の王妃の私的空間に飾られていた絵画作品の分析を行い、王妃の表象ないしイメージ形成の特質を明示することにある。研究史の欠落をなす部分を補うことを念頭に、マリー・レクザンスカについては、ヴェルサイユ宮の王妃の私室に置かれた絵画、マリー・アントワネットについては、王立絵画彫刻アカデミーの画家による王妃の肖像とそれにもとづくタピスリーに織り出された王妃のイメージを、それぞれ主たる考察対象とした。

(2) 18世紀の王妃の表象をテーマとする本研究の独自性は、研究状況に照らすことで明らかとなる。日本において、マリー・レクザンスカを取り上げた研究は皆無に等しい。一方、近年フランスでは、このルイ15世の王妃に光をあてた3つの展覧会が開催された(フォンテーヌブロー宮殿2011、ワルシャワ王宮2013、ヴェルサイユ宮殿2019)。しかしながらこれらの展覧会は、マリー・レクザンスカに関連する美術作品や同時代の装飾美術作品を提示しながら、その生涯を広く紹介するものであり、王妃の表象や芸術家との関係等を問うといった視点は欠如していた。一方、マリー・アントワネットは、数多くの評伝(ツヴァイク1948/フレイザー2006)が公刊されている。美術史的視点にもとづく国内の研究では、画家エリザベト＝ヴィジェール・ブラン研究のなかで王妃の肖像について言及されてきた(石井2011/安井2011/鈴木2019)。また18世紀フランス宮廷美術研究の泰斗グザヴィエ・サロモンとジョセフ・バイリオの監修による同画家の大型展覧会(ニューヨーク、メトロポリタン美術館及びパリ、グラン・パレ2015-2016)のなかでも、王妃の肖像は取り上げられた。しかし、この女性画家以外の画家の手になる肖像のなかには、いまだ十分な光が当てられていないものもある。本研究は、18世紀ブルボン朝の王妃の表象について、美術史的観点(様式・図像・歴史的文脈)から分析することで、こうした王妃をめぐる先行研究上の欠落を補完するものである。

3. 研究の方法

(1) マリー・レクザンスカについては、この王妃の存命中にヴェルサイユ宮の王妃の内殿に飾られた一連の絵画作品の調査研究を実施した。そこに飾られていた絵画作品の実態と、それらがどのように室内に展示されていたのかについて、宮殿の建築に関する一次史料や同時代文献を丁寧に調査し、当時の状況を再構築することを試みた。

(2) マリー・アントワネットについては、王妃に仕えた宮廷画家によって制作された肖像画を網羅的にリストアップしたのち、王立絵画彫刻アカデミーの画家による王妃の肖像とそれに基づいてゴブラン製作所で織られたタピスリーによる肖像に焦点をあてて調査研究が進められた。実見調査、図像学的分析、および関連資料、同時代評価を含む一次史料を精査した。ブルボン王朝の王権表象を作り出した第一級の芸術家たちの貢献がいかなるものであったかについて、美術史研究の視点から明らかにしていった。

(3) 以上のように、一次史料及び最新文献の調査、実見にもとづく作品考察によって研究は遂行された。一連の成果は、欧語及び邦語による個別的な論考として公刊され、口頭発表のかたちで発表された。

4. 研究成果

(1) 初年度は、ルイ 15 世統治下のヴェルサイユ宮の造営、室内装飾に関する資料の収集、マリー・レクザンスカのために制作された絵画作品の基礎情報の整理と画像収集を実施した。これらの調査研究の成果は、仏語論文としてまとめられた。ここでは、マリー・レクザンスカの時代におけるヴェルサイユ宮の王妃の内殿に見られる装飾絵画の特質について新たな知見が提示された。王妃の内殿には、数多くのパストラル(牧歌的理想風景)を主題とする絵画作品が展示されており、それらの作品選択は王妃自らの意向が大きく反映されたものであった。そこには、王妃自身が制作した作品も含まれていた。マリー・レクザンスカの田園趣味が視覚化されたヴェルサイユ宮のイメージ空間は、のちにマリー・アントワネットのものとして造営されるヴェルサイユの離宮、プチ・トリアノンの村里に先駆けて作られたパストラル空間として重要であり、王妃のイメージ形成の展開を考える上で注目に値する。

(2) 2022 年度は、王妃のために作られた 18 世紀の宮殿装飾の調査研究とともに、王妃のイメージに関わる文献資料の収集が実施された。この時代の室内装飾、装飾様式をめぐる考察から得られた知見は、内閣府迎賓館赤坂離宮で企画された、迎賓館の天井画並びに「花鳥の間」の室内装飾に関する口頭による解説会にて有意義に生かされた。その概要は、迎賓館ホームページ上で公開されている。

フランスの現地調査では、研究史において見過ごされてきたマリー・アントワネットの肖像とそれにもとづくタピスリーによる肖像に関する最新情報を入手した。これらの作品については、次年度も継続して調査研究が実施されることになった。

なお当該年は、マリー・レクザンスカの時代に、パストラルの主題で名声を博した国王の首席画家フランソワ・ブーシェによるタピスリー・デザインに関する包括的研究が完成をみた。その成果がまとめられたローザンヌ大学の博士學位論文には、同年、ローザンヌ大学文学部賞が授与された。ブーシェのデザインのもとづくタピスリーは、ふたりの王妃の存命中にきわめて高い評価を得ており、この研究成果は、美術・工芸史、室内装飾の研究史の発展に学術的に貢献するものとなった。

(3) 最終年度は、前年度に引き続き、マリー・アントワネットの肖像とそれにもとづいてゴブラン製作所で製織されたタピスリーに関する調査分析が進められた。18 世紀ゴブラン製作所は、国王や王妃をはじめとするブルボン王家や王侯貴族の肖像の制作に力を入れていた。マリー・アントワネットの肖像もその一環として制作された。こうした織り出された王家の肖像は、当時よりヴェルサイユ宮の王妃の間をはじめとする室内に飾られていた。タピスリーによる王妃の肖像は、これまでほとんど論じられることがなかったが、絵画や彫刻、版画媒体にもとづいて形成されてきた王妃のイメージ体系の一部をなしている。この研究成果は、仏語論文として公刊されることが予定されている。

上記の研究を進めるなかで、ルイ 16 世とマリー・アントワネットの時代にゴブラン製作所で織られたタピスリーの制作状況の実態を把握することが重要な課題となった。そこで、ルイ 15 世およびルイ 16 世の時代にかけて成功を収めたタピスリー連作「神々の愛」について一次史料にもとづく調査研究を行った。これらの研究成果は、美術史学会全国大会の口頭発表および、雑誌論文として発表された。

(4) 3 年間の研究期間を通じ、二人王妃、マリー・レクザンスカとマリー・アントワネットのイメージ形成に関わる肖像画、ヴェルサイユ宮殿内の絵画装飾を中心とする研究が遂行された。実見にもとづく作品の観察、一次史料をはじめ最新文献を踏まえた考察により、王妃の表象について、新たな知見を提示することができた。18 世紀の王妃をめぐる一連の研究成果は、近世フランスの王妃をめぐる表象研究の重要な一部をなすものであり、今後、16、17 世紀の王妃のイメージ研究へと展開可能な萌芽研究として位置付けられる。また本研究は、これまでさまざまに論じられてきた国王の表象研究とあわせて、フランス王権表象の包括的理解の深化に寄与するものとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林亜起子	4. 巻 11
2. 論文標題 「18世紀王立ゴブラン製作所の連作 神々の愛 について」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『パラゴネ』青山学院大学比較芸術学会委員会 編	6. 最初と最後の頁 78-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林亜起子	4. 巻 -
2. 論文標題 「迎賓館赤坂離宮の室内装飾と「花鳥の間」の天井画について」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 内閣府迎賓館赤坂離宮HP掲載	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Kobayashi	4. 巻 19
2. 論文標題 Marie Leszczynska et la pastorale peinte dans les Cabinets de la Reine a Versailles	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Aspects of Problems in Western Art History	6. 最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林亜起子
2. 発表標題 「王立建造物局総監マリニー侯爵とゴブラン製作所の連作 神々の愛 について」
3. 学会等名 美術史学会（全国大会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林亜起子
2. 発表標題 「迎賓館赤坂離宮 天井絵画作品解説会－天井を彩る華やかな油彩画（第2回）」
3. 学会等名 内閣府迎賓館赤坂離宮（主催）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林亜起子
2. 発表標題 「迎賓館赤坂離宮 天井絵画作品解説会－天井を彩る華やかな油彩画」
3. 学会等名 内閣府迎賓館赤坂離宮（主催）（招待講演）
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 小林亜起子
2. 発表標題 「アカデミーの画家と18世紀のタピスリー」（日仏美術学会創立40周年記念シンポジウム「フランス美術研究の現在と未来 日仏学術交流の進展を目指して」）
3. 学会等名 日仏美術学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 国立新美術館，日本テレビ，ルーヴル美術館編集	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本テレビ放送網：国立新美術館	5. 総ページ数 282
3. 書名 『ルーヴル美術館展－愛を描く』	

1. 著者名 Akiko Kobayashi	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Universite de Lausanne	5. 総ページ数 449
3. 書名 Francois Boucher et l'art de la tapisserie des Lumieres (these de doctorat)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------